

めざす男が、百メートルほど前方の左手に建つ、古い賃貸マンションの一階に住んでいることはわかっていた。腕時計をみる。午後七時二十分。ひとり暮らしたが、たぶん男は自宅にいる。「ハローワーク」か地元の図書館くらいにしかいくあてのない男だ。この時刻なら、まずまちがいく自宅にいる筈だ。

彼はそつと息を吐き、携帯電話をとりだした。

まず、何と話を切り出せばよいのかが問題だった。いきなり訪ねて行って話すのは論外だ。よくて新興宗教の勧誘、悪ければ一〇番されるような危ない奴だと思われるのは見えている。

あまりにも途方もない話なのだ。

——初めまして、アダム四号。僕はアダム一号です。

そう自己紹介したら、これから会う男は、何と答えるだろうか。

馬鹿げている。相手は何ひとつ知らないのだ。アダムとイブのことも。知らぬ間に自分が、世界を変える、鍵 になつていけるのも。

まずは電話だ。最初は、こちらがまつとうな人間であることを、きちんと理解してもらわなければならぬ。

人と話すのが苦手な自分が、なぜこんな真似をしているのだろう。そう考えると、気力がなえそうになる。

地下鉄など乗らず、さつさと通勤用の自転車で家に帰ればよかった。パソコンとゲーム機に囲まれた、居心地のよい自分の部屋に入り、鍵をかけてとじこもっていたい。そして何日も、誰とも会わずに過せたら、どんなに気持が楽だろう。

いけない。自分は逆戻りしかけている。

彼ははつとした。やつと一年前、四年間もの引きこもり生活に訣別を告げただばかりじゃないか。こんなことで元に戻つてどうする。

とにかく、選ばれたのはあの男であつて、自分ではないのだ。あの男が一面識もない人間で、しかも三十歳以上も年上だからといって、自分に何をするというわけではない筈だ。

殴られたり、頭ごなしに怒鳴られるのは嫌だった。人に威されるのが、何より駄目なのだ。相手が男だろうが女だろうが、年上年下に関係なく、少しでも自分に悪意をもっていると感してしまつと、彼は駄目なのだ。

もちろん、世の中の人間すべてが好意を抱いていてくれるとは信じていない。無関心でいてくれればそれでいい。彼は自分の愛する小さな世界にいられればそれでいいのだ。閉じこもっていた「巣」から抜け出し、ようやく外の世界と接触をもつたばかりで、できればそこにずっといたいと願っていた。そこにいる人たちは、彼に深入りしようとはせず、そのことが何より、彼をほつとさせる。

誰とも深くかかわりたくない、かかわれば必ず、相手の心の中に悪意を見つけてくることになる、それが何よりつらいのだ。

気づくと、壊れそうなほどきつく携帯電話を握りしめていた。彼は立ち止まった。動悸が激しくなっている。ボタンに指をあてがい、03という番号を押したところで気づいた。

いけない携帯電話は駄目だ。発信記録が残ってしまう。

アダムとイブを捜している奴らは、あらゆる情報を手に入れる力をもっている。自分がアダム四号に接触したという事実を残してはならないのだ。

唇をかみしめ、顔を上げた。公衆電話を捜さなければならない。だが今どき、公衆電話なんてどこにある。

今いる道は、表通りから一本引っ込んでいて、マンション以外には、スナックと居酒屋の看板がぼつぼつと点っているきりだ。

駅だ。地下鉄の駅にいけば、公衆電話がある。そこからアダム四号に電話をして、会ってくれと頼もう。

もし断られたら、そのときはあきらめて帰ればいい。駅なのだから、すぐに帰りの電車に乗りこむことができる。

回れ右をした。

電話ですべては説明できない。いや、言葉でだって怪しいものだ。説得するには、パソコンの画面を見せるのが一番だ。だが彼のパソコンはデスクトップで、自分の部屋にある。

そこに誰かを入れるなんて論外だった。親ですら入れたくないのだ。

言葉で納得してくれないのなら、そこまでだ。自分が知ったこと、感じている不安のすべてを

話したら、あとは向こうの問題だ。

アダム四号は彼の父親より年上だった。四歳上。父親は無口で、彼のことにはほとんど無関心だ。高校に入ってからこっち、父親と短いやりとり以外の会話を交したという記憶はほとんどない。自動車の修理工場をやっている、ガソリンとオイルの匂いが、父親の歩いたあとには漂っている。

六十歳の父親より、四つも上のアダム四号は、自分の話を最後まで聞いてくれるだろうか。

信じてくれるとはどうてい思えない。聞いてもらえれば、彼が話すあいだ、黙っていてくれれば、それでいい。あとはあんたの問題。

あんたがどうするかだけのことなのだから。

知らぬ間に、アダム四号に対し、怒りにも似た感情がこみあがるのを、彼は感じていた。

あんたがいるから、僕はこんな面倒なことをする羽目になったんだ。あんたなんか知らない。どうなったってかまわない。世界も、この日本も。

地下鉄の駅の階段を下ったとき、不意に公衆電話が目にとびこんできた。ありふれたその形に、しかし彼はどきりとした。

公衆電話を見つけてしまったからには、もうあと戻りはできない。

電話をして、会って話をする、少なくとも会ってくれというこちらの意思だけは伝えなければならぬ。

呼吸が荒い。震える手で彼は受話器をとった。

電話が鳴りだしたとき、尾津は、茹であがった枝豆を、鍋からザルへと移したところだった。もわっと湯気があがり、青臭い、だが香ばしい匂いが鼻にさしこんだ。流しのステンレスが熱に膨張して、ボンという音をたてる。

みずみずしい緑をした枝豆に、ひとつかみのあら塩を振り、ザルごとゆすつて、塩をなじませた。枝豆は好物だった。この枝豆と二本の発泡酒、そして今朝炊いた飯を握った、二個のおむすびが、尾津の夕食のすべてだった。テレビではプロ野球中継が始まっている。ささやかではあるが、一日の中で最も充実した時間といえる。食事とテレビ観戦、ふたつもやるのが重なるのは、今の生活では珍しい。

そこに電話が加わった。

この時間、かけてくる人間に心当たりはない。可能性があるとするれば、二年前に別れた妻の恭子だが、この一年、恭子からの連絡はなかった。

湯気を立ち昇らせた枝豆のひとつをつまみ、熱いのでサヤごと口に含んで、前歯でひと粒をしごきだした。やや固めの、香ばしい豆を噛んで、頬がゆるむのを感じた。これがあれば、今夜の楽しみは保証されたも同然だ。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。